

東京 IPO 特別コラム

2020年1月7日 Vol.156

波乱の幕明けとなった2020年大発会

皆様明けましておめでとうございます。今年も本コラムを宜しく申し上げます。国内外の諸情勢を反映して2020年の大発会は波乱の幕明けとなりましたが、相変わらず日本株にはファンダメンタルズから見て弱気に傾きがちな投資家心理が働きやすいとの印象を持っています。大発会は一昨日日経平均が大納会の終値に比べ500円以上も値下がりした訳ですが、2日目の本日はNYダウが比較的堅調な推移を見せたことで安堵感も出たのか戻り相場を見せています。とは言え2020年の株式相場はまだ始まったばかり。何が起きても不思議ではない世界情勢の中、今年は日本ではオリンピックが開催されることになっています。世界中の目が日本に集まる2020年です。そうした中、少しでもポジティブな取り組みをなせる投資家の皆様が増えることを願っております。

さて、1月はIPO市場がお休み期間となりますが、既に2月7日のコーユレンティア(7081・JQ)とジモティー(7082・M)のIPOが予定されており、関心を向けられているものと拝察致しております。この間は12月のIPO銘柄や過去のIPO銘柄の中から魅力的な銘柄を見出してみたいかがでしょうか。IPO銘柄の多くは企業の内容が未知数な段階でIPO直後に人気を集め、高値をつけることになりがちですが、概ねその後は調整の動きが見られ、中には見向きもされないで放置されてしまうケースも多いように思われます。IPOしたばかりの企業はIRが不足気味で十分に認知されていないのかも知れません。また、これまでのIPO銘柄で聞こえてくるのはIPO前には幹事証券から余分なことはするな、前向きな投資も控えてほしいといった要望が出され、企業側は我慢をしているとの話です。成長指向の企業の場合は先行投資をしながら業績を向上させていくことになるのですから、この上場を前にした時期に本来実行すべき先行投資ができないとなると次の成長ステージでは業績が停滞することも考えられます。まだ上場したばかりで事業規模の小さなマザーズやJASDAQ上場の企業にとっては資金調達のほか人材採用で有利になるなど上場メリットもありますが、一方ではせっかくの成長の機会を失うこともありうるのです。投資家にはそうした事情はなかなか伝わってきませんので上場後に好需給で株価が高値をつけてしまい、その上場後の高値をなかなか抜けないまま長期にわたって株価が低迷しがちです。また、最初から成長期待があってやや割高な印象がある銘柄も多く、IPOしたばかりの銘柄で運用成果を上げるのは難しいとお感じの投資家がお見えになるのかも知れませんが、じっくりとIPOした企業の経営戦略や今後の事業展望に耳を傾けて頂き、成長のトレンドやリスクについてご理解頂きたいと思えます。本コラムでもそうした情報をご提供申し上げたいと思っておりますので、引き続き宜しくご愛読のほどお願い申し上げます。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)